自由連合
Libera Federacio
1971年4月20日
No.27
自由連合社
堺市北花田354 向井方
定価 1部 30円
振替口座 大阪1264 自由連合社

編集後記

《なぜ編集室なら始めるな》

さくも強くも、なかり定善してきにゃ自連ぢのイメージを、こうして打ちこめそうとするのはなぜな？ぼくらは今月号をこういう形で出すのは、単にマンネリに対するアンチではない。今のぼくらにとってこれしか作りようのないものなのだ。

本紙27号＝一周年特別号の巻頭論文は「自連はやったこと、やれなかったこと、やろうとしていること」（尾関弘）と題されている。さらに一年を経た今、再び自連は何をやったか、どこまで「状況としての自由連合を具体化する契機」となり得たかなと問うてみよう。ぼくには否定的な答しか出て来ない。この間たんなる読者でしかなかったぼくは言うのは無責任なことだが、少くとも「このままを「状況」足するわけにはいかない」と感じさせる程度には何もできていないと言えるのではないだろうか。

また、二年前と変べると、ぼくらをとりまく状況は大きく変わってしまっている。「常に状況にコミットする姿勢」と言いながら、状況から離れて（遅れて？）しまってはいないだろうか。どちらにせよ、そのことを常に問い返えさない限り、自連は実際の状況から離れてしまう。今は点検し直すのに丁度よい時期ではないだろうか。

二周年特別号は企画された時、ぼくの頭の中にあったのは以上の二つのことだった。しかし、この特別号を何らかの総括なり問題提起なりを行なおうとしながら、しかも編集者なりこのままではあかんと感じていながら、今月号を以前と変わりのないまま出していいのか、何かなんでも出すことがそれほど必要なのかという問題につき当ってしまった。それを避けて、26号と同じようなものを作ってしまうことは一つの逃げのように思えてきた。このままではぼくの正直な気持ちを出したくないというのがぼくの正直な気持ちである。

Ω　Ω　Ω

編集に携わってみて痛感したのは第一にぼく自身の無能さであり、第二にぼくの不在である。それなのにぼくのひとりよがりでないならば、「その時君は社員である」と執拗に言い続けてきたものは、「自連は経営」とは何だ、と言うその人へ経営とは何だったのか。大きな問いを抱え込んだまま、一つの高く厚い壁にぶち当った状態で、ぼくら編集スタッフは何度か集合を開いた。

自己切開からの出発

……自連に加わる以前の自分となかった後の自分が、自連という媒介によって、どの程度なわり得たか？どの部分がどう変化したのか？もし変化なしと言う君の場合は、それは何故なのか？というきわめて即自的な点からきりこんでいきたいのです。つまり自己切開から出発すること、その自己切開のメモ化・文章化を前提として話し込みたいのです。

という招請状へ文責＝石川司）を受けて、向井孝は「活版かなり版かというのは二の次にしてこのことを話し合わなあかんのんちゃうか。自連を続けることを暗黙の了解にしてたらあかん。自連なんなやめやいう結論が出る可能性をも含んで、まず自分のことを具体的に話す中から自連像を客観的に描き出してみたいし」と発言した。

ぼくらの甘さのせいか、心情的露的思いを話すこの集合を支配したが、各人の自連への関り方、或いはその人にとっての自連はある程度まで明らかにされた。また自連のやるべきこととして、読者の中を一つの層をなしているヘショボクレ人間〉な自らの弱りさっている部分に気付き、自らそれをえぐり取るように働きかけていくべきではないかということを話し合われた。それには、同じ穴のムジナである自分を切りさざるなければならない。そこから始めることを今最も必要とされている。

この時ぼくの出した総括(?)は次のようなものである――①ヘサテン左翼〉から抜ける契機を求めて自連にきたが、まだ抜けきれていない　②自連と離れては今なにもしていないという点から、意識としてまだ自連に頼っている　③事務を通して、人との関係を作れれば、ぼくにとっては原稿書きや編集よりも意味がある　④一見つきらないことに見える事務をやりきりたい　⑤「自連」に関しては「紙面の上で自由連合を具体化する」ことならズレ、情報紙化してしまっている面がある。

その後も「このままではあかんし」という気持は強まるばかりだった。Dの中の焦りと「自連」作りの大幅な遅れ……ぼくはどうあってももっと突っ込んを話したかった。

Ω　Ω　Ω

そのうちに「今月号は読者に対する問題提起を紙面を埋めるよう」という方針が誰からともなく出てきた。つまり、編集スタッフの間を出てきた問題を読者に呈示し、さらに出すことによって、読むだけの人読者〉な行動する人社員〉に自らを変えていく契機としよう、というわけだ。

こうして再度開かれた編集スタッフ内での集合を通じ、関っているぼくらの問題として、「自分と自連との関り――一体どこまで関るのか？」ということがまず出て来た。

千葉――自連と取組む中で、総括として釜ケ崎が出てきた。そこから自連と関り直すつもりでは、今の全国版「自連」とは「亀裂アンコレの原稿を書くぐらいしか話点がないように感じる。それ以上の話点を見つけることが自分と自連との関りという問題に解答を出すことになるのだろうか。

川崎――八月が九月頃までに今の関り方を変えたい。新しい運動を始めるつもりなので、これまでのようには時間を割けなくなる。しかし、この状態ではそれも思うにまかせない。自連を担っていこうとする次の人間が必要だ。今までそういう人が少なかったのは、読者に働きかける力が弱かったからではないだ

さうかすのインクが滲んでいるのは、発行が遅れてホントにごめんなさい。早かったのでガリ切りもジャンジャンやれたのに。知らないうちにガッタガタになっちゃった。

青春 読書 日記　第27号

1987年 4月20日　LIBERA FEDERACIO

編集者への理想的な社員へ

いま、おしんぴぞにせ力出したとの
編集者は自身の生涯、ぞそれは、
は、それだけは絶えるためは
る。それは誤れるためは
ただ。それは、乙男の一面を作る
問題を今えることは
の課題であり、
一面のそれ自身は、原稿のそこ
る過程とはそれなく、原自身の
はなぜ編集者だろう。これは、
問題として生きていない。
ただ、それは、
ただ。それは、
ただ。それは、
ただ。

自連紙上を論争でうずめるのだ

宮園多恵子

自連紙上の記事を分類することはしばしば困難であり、無意味だが、①純思想的な、あるいは心情吐露的文章②闘争総括的時事評論的文章③ルポ的文章④運動・研究会よびかけ的文章⑤伝言板⑥座談会・対談的文章がよくのせられている。それらのコチャマゼ的文章はたくさんあるが、記事の書き手はもうすこし、照準をあわせて書くことによって同じような問題意識をもった読者＝社員と、ヨリ緊密な関係をとりむすぶことが可能になるとわたしは思う。

それが前提となると、各欄の中で前号のこの記事のココがわからないというような質問や、反論があゝいに期待することができるようになる。今までの自連は各号ごとに目的意識的な連続が欠除しているので点々にして断片的なものになりがちだった。編集諸兄が記事がない記事がないとウロウロしている様が紙上に反映している。従ってつまらなくなる。問題意識というやつは深めれば深めるほど味が出てくる。深めるためには沈思黙考の時間が必要もさることながら、優秀な論敵を持つことがなりより必要なことだとわたしは思う。たとえば21号の山口論文と23号の宮園論文、さらに11号の尾関論文はかなり深い関連を持っている。そのそれぞれは互いに露骨に批判しないためにそこで終ってしまいがちだった。スキースの関係から断片的になるということはあるが、短かい文章の中でも、論旨を集中させる努力によって批判と反批判はある程度可能である。これはぜひともやるべきだ。自連紙上を論戦でうずめる。これをわたしは提案したい。そしてその第一歩として、アンケートのうちでヨキのいゝやつを公開し紙上掲載することである。また、定期的に同じ問題意識をもっている連中が集って、座談会＝論争をやり、それを紙上再生するという企画などもできるだろう。

総じていえば、初期の自連は独自調＝報告調であった。だんだん変ってきて現在乱調である。これからは対話調＝論争・総括・展望調でいこう、それぞれの分野での自由連合を実体化していこう、というわけだ。

結社の表現構造

花田咲子

つい数年前までは、全く自明のものとされていた全共闘運動を、普通名詞としての山本義隆、秋田明大が、現在どのように総括したかが、ぜひとも明確にされねばならない。何故ならば、いわゆる全共闘世代には〈カクメイ〉を〈私達〉のものとするための共同性の考察がテッテ的に欠落していたから。「マスコミ界には様々な組織論が登場したが、現実には唯一つの〈結社〉さえ存在しなかった。例えば、全共闘の風俗化を拒否すると宣言したノンセクト・ラディカルの思想誌でさえ、現在は全く休刊同様の状態に落ち込んでいる。かつての全共闘が、黄成パルタイの組織とこれを区別したということは、既成の〈私達〉と区別したということである。しかし全共闘が、いかなる〈結社〉をも生み出さなかったということが示しているように、新たな〈私達〉は不明であった。そしてその過程がシコシコの秋であった。そこには、激烈な対権闘争も分派闘争も存在しなかった。現在の情況が、10年前よりも目ざましくなっているのは、解体や分裂の策動さえも存在せずに、自然崩壊してしまう〈私達〉、という問題に直面しているからである。この現象を拒否する〈結社〉とは、はたして何か。

一人の人間が、原稿用紙をうめるという行為と、その出版を許可するという行為とは、まるで意味が違う。不特定多数に向けた情報活動においては、発行ルートに従って問われる一切の責任がなくなり、社会の関係性は逆にさかのぼって、その表現者に集中するということである。この基本的な構造は、いかなる社会においても、その社会の本質と関係している。こゝに〈私達〉の〈カクメイ〉がある。こゝに〈自立誌〉の、〈ミニコミ〉の意味がある。

つまり、表現者、編集者、発行者、読者というルートを短絡させ、例えば表現者と読者という関係を構築することによって、表現者がカリ版イデオローグへと自立し、読者が表現者へと自立する〈結社〉の可能性が、現在問われているのである。個のアジテーションを目指すことによって、一見〈私達〉が可能であったかのように見えたかつての全共闘運動の総括は、この〈結社〉の問題に触れない限り、総括とは言えない。〈私達〉をとりまく情況が、〈私達〉の不可能性であるという今日、文字に達する表現者を追放し、〈私達〉の拠点を誌上に構築しなければならない。多分、〈結社〉を可能とするカリ版イデオローグは、解体や分裂を策動し続けることによって、〈私達〉を仮装し工作し続けるのであろう。

3組への模索

「自由連合」の軌跡と自由連合への軌跡

"自由連合"と考古学闘争

岳石太平

考古学の世界には日本考古学会を頂点とする支配権力構造が強固に確立されている。こうした体制の総和が今日の国家権力の基盤を支えるものとなっているのである。国家支配体制が、人間をさまざまな領域に細分し、そこに没頭させることによって支えられている以上、ボクタチはあらゆる領域から反逆を開始することによって、全体性を回復することにつとめねばならない。そしてそれは日常空間からの反逆によってのみ示されるのだ。

ボクは大学の考古学専攻科生とし

【次頁へ】

LIBERA FEDERACIO
4月2日 1971年
第27号
自連

【前頁より】

て規定されているその枠を取りはらう作業を開始する。大学の考古学研究室解体や日本考古学協会を解体する闘いをおし進める事によって、異領域での闘いを進めていく。他間との連合を求めていく。たしかに現在ホウのあかれている状況は非常に困難である。しかも同じ考古学闘争を担っている全国考古学闘争委員会連合の全てが考古学闘争を"自由連合"として把握してしていこうとする部分ではない。しかしボクは全国考闘委連合を、真に"自由"と"連合"による運動をおし進めるものとして組織化していくつもりである。

"自由連合"はそれ自体が決して一つの運動体、組織体としてあってはならない。生活領域からの個別の運動が"自由"と"連合"を基盤として結合している流動的な組織、それが"自由連合"である。このような"自由連合"として把握される運動が「自連」にもっと載ってもよいはずである。"自由連合"はそうした小さな運動が相互に交流し、関係しあう中で生まれてくるものである。

手作りの良さ、芸術的作品?の良さがあるのではないか。

ここ二コこの良さは大間くさゝだと思う。コルッ!と切れば赤い血が出る……。

小ぎれいになってもコキイが一段高くなって、わしらシャコバー姿が気ィつかうようではねえ……

まあ、カラがわるくて少タムチャクチャで三ナャ〜〜〜〜ヤ〜〜やって、「アナキストのカキャー!」「セクトのがさゃあ!」なんてやり合っとりゃあ、えゝのんとちゃいまっか——。

一講読者として

和田喜太郎

購読すること、かゝわることすなわち社員である、といわれてみても、おれはやっぱり単なる購読者にすぎない。つまり野次馬的II場。お前は身内であるぞ、といわれてもしょせん客人である。でも客人なら客人なりの仁義があろう。その意味で「自出連合」には色々御厄介になっている。

何しろ貧乏育ちで粗衣粗食にはなれている。不満はないか、望みはないか、ときかれても万事結構つくめて、おいそれとは浮んで来ない。どうしても腹にすえかねる様なことがあったら、その時はあそれながらと進言することにいたしやしょう。

活版化も結構なことにはちがいないけど、せこがかゝって長続きせんようだったら、無理せん方がえゝとわしは思う。カリ切も大変手間のかゝることにはちがいないし、誰かゞ犠牲的に時間をさかねばならんことはたしか。そうばん勘定ではとても合わん。とは思うけど、カリ版はカリ版なりの良さ、

僕と自連

ばんただし

まず「自連」て何なのだろう。種々なセクトのように、これを媒介にして運動を行う性質のものではないし、運動の報告(総括)でもない。理論紙ともいえないし、アジ紙でもない。あえて言えば、我々民衆の側のか弱い情報紙であり、生きている報告であろう(か弱いとは、雑草のように生きる粗雑さであり、このことは、本当は最も力強い我々の日常の叫びである。)。

では、僕と自連はどこで結ばれているのだろうか。今、情報紙だと言った。この情報と思想(自己の生命内部からの生き方)によって行動が生れてくる。この状態が、僕と自連の生命をもとにした関係ー〈生〉関係である。

この〈生〉関係を正常に保つための、これからの課題は何なんだろう。世はファッショ化・軍国化へとひたすらに邁進している。手巾を広げ、急いで僕と自連のような〈生〉関係を裂こうと、権力や院内左翼それには、やっきになっている。この状態で如何に〈生〉関係を正常に保ちうるかゞ大きな課題となる。無焦点の状態が、必然的に生きがい・死にがいを求める方向になり、気が付けばファッショ・軍国だったてなことにならないようにしなければならない。特に、日本国?では、過去に天皇ファッショ・軍が結びついたし、これからも結びつくようである。僕が何を考えるにも如何なる行動を行うにも、やはり、天皇(ファッショ・軍)思想に結びつかないかを考えてゆきたい。「自連」にも同じことを赤裸する。それと同時に、か弱い1人の生命を殺されない、殺さない——か弱く生きていける方向に、〈生〉関係が成立するであろうことをも。

「自連」に関する断片的所感

杏村総兒

「自連」というものを客観的に見ていかなるものであろうと、僕にとってそんなことは大したことではない。国家機構からの見地、赤色ファシズムからの見地、アナキストからの見地——人はそれぞれの主観によって「自連」に多様な意味を付する。しかし「自連」についてどのような解釈が真理であるかという問題は、あてらくは「自連」を形成する主体における問題に還元されるものであろう。

赤色ファシズムの機関紙などは、読者の正常な思考能力を破壊し、組織奴隷を製造することを明確な目的としているのだが、「自連」の目的は一体何であるのか、理解に苦しむ場合がある。例えば、カスト口体制を非難するような記事や鉄面皮な権力の豚であるも沢東を信仰する京浜安保共闘の社会的犯罪を弁護するような記事なども載っている。それらを抽象抽象して統合してみると現存の社会体制への反対という一点のみが結論されて来る。この事実から、「自連」編集権力において現体制即悪という、まことに高度な先験的判断が横行しているのではないかという感じがしてならない。

＊＊＊

かつて全共闘の戦いは、機動隊の警察コントロールやカトリック共産党の民主化棒にではなく、セクト共産党の低劣愚昧なる宗教権力によって圧殺された。そして今や、第一、第二、第四、第五……の日本共産党は、第一の日本共産党の尻を追いかけて行こうとしている。もはや勤皇か佐幕かを問うことは、まったくナンセンスである。最近われくは、「新左翼」という名で呼ばれている現代旧左翼によって日本左翼に賞徴されているマルクシズムの本性を再認識させられている。マルクシズムが社会主義の条虫であることは、すでに一世紀前にエルードンが看破した事実である。改装したマルクシズムの笛や太鼓に踊らされている「自連」を見ることは、僕にはとても我慢のならないことである。

＊＊＊

【次頁へ】

【前頁より】

現存「自連」が漠然としたものである以上、僕のそれへの所感もまた漠然としたものにならざるをえない。今後の「自連」の展望は、少くとも回顧する限りからは悲観的なものに思えてならない。赤色ファシストや黒色ファシストにどう対決するか。いや、現代日本のパリルラ・ファシスチであるマルクス・ボーイの人海を「自連」がどう乗り切るか――想ってみたゞけでも心細くなって来る。

しかし、イデオロギー的には相異しても「自連」編集権力がアナキストである限り僕は「自連」を信頼する。また、僕なりのやり方で共同の重荷を喜んで担ごうつもりである。いずれにせよ、われくは理想主義の火を絶やすことなく、現実を開拓していく鍬を決して手放しはしないことを誓い合おう。

編集室

〈2頁下段よりつづく〉

連に来て自連の事務をし……ということはぼくの運動につながっていかないだろう。ぼくは『自連』を通して常に〈自分と状況〉〈自分と無数の社員〉の関りを問いつづけたい。自連は即事的に利用されることを拒むからこそ、ぼくは自連を自分の運動の〈場〉とすることができるのである。

〈編集者〉が〈社員〉となり、〈読者〉も〈社員〉となり、〈社員〉同士の関りの中で、より〈社員〉となる。ぼくは自分の運動としてそういう方向を選ぶし、それは具体的には〈事務〉をすることとなって現れる。

Ω　Ω　Ω

ここでぼくは自分の「自連論」と「運動論」を精一杯述べてみた。「全然イメージわいてこない」と言われても「これ以上申し上げようがございません」と開き直るほかない。(P.6を参照してもらえれば、もう少しわかりやすいかも知れない)それのことも含めて、この雑文はあらゆる意味で《未完》である。

〈杉原哲生〉

尾岡弘著
現代のアナキズム運動
三一新書
自連社でも通信販売します
¥350

自連のイメージ

個々の記事についてではなく、自連そのものの意味を問い返す必要があると思えてならない。三里塚があったから書くというんじゃなく、原稿を拾い集めてくる関係じゃなくて……。

〈三鷹　Y・K〉

三号分読んだ時点でまだ納得できず。わからんネェ、この程度のものなら全国的に拡げて郵政省にもうけさせる必要もないと思うんですけどネ。

〈東京　S・N〉

たった一言、イデオロギーに過ぎるのだ。ヌーディスト・キャンプやハレンチなワイルド・パーティのことを載せよう。(大阪　T・H)

自連は形式ばっているが、これでいいのかな?毎号同じような形なんて、これは一つの体制ではないのかな?

〈姫路　E・I〉

ぼくは「自連」が「構造」や「情況」とそんなに違わない情報紙のように思う。

〈石川　H・H〉

なんとなく、このところ自連紙が軟化しているような気がする。編集が〈青少年〉の手に移ったからでもないのだろうが……。

〈東京　Y・S〉

すべてに関して表面的で下らない。読み終ったあとに何も残らなかった。言葉の重さが全然ない。

〈大阪　N・K〉

「自連」は何を意図しているのか?「自連は運動やない。新聞を出すだけの経営体や」ホントにそう考えているの?小生はすべての行動が何かと関連をもって進行していく時に意味をもつと思うのだが。(東京　Y・U)

ぼくはこの自連運動が权力に反抗するすべての個人・集団の〈自由連合体〉だと思う。ぼくは自連がアナキズム派という一つのセクトにこり固まるのを恐れる。(飯塚　K・Y)

俺はこいつを受け取ると不安にかられるんだ。不安にかられてオドオドしながら読んで、読み終ったらホッとしてポイと投げる。

〈西宮　K・S〉

例えばこのアンケを送るとして、私は文字を書きながら、この一通で自分の生活が一変せられることをひそかに期待している。しかし自分から動き出さねば何も変化しないことを感じている。

〈大阪　E・E〉

アンケートよ、あまえは…

近況報告

僕は仲間と工房の建設にとりかかっています。愛知県では昔から文化闘争は組めないと言われていますがなんとか進めていくつもりです。

〈名古屋　T・S〉

A大にも関東における自由連合=社会革命派の闘争に入っていくのは5~6名いるのですが、学内活動は全くダメです。将来はイナカに帰って自由連合運動を創っていくつもりでいます。

〈東京　M・N〉

僕は労組を作っています。なんにも知らないので一貫してドジっています。結成したら会社の一番高い所にクロハタをあったてます。

〈名古屋　A・I〉

〈生活〉と〈闘い〉

共同体は単に生活するのに便利だという点での寄り集まりではない。闘いの過程において、闘う者たちのコミューンをいかに創造するか」という問題の欠落したところでは成立しない。ぼくの場合、農本主義的ユートピア的発送からの出発であるため「闘いの過程」に於て「血と土」のつながりをどうかちとるかが問題です。

〈　M・H〉

宮園論文(73号)はいろいろ参考になりました。ぼくも共同で生活できない者が多いことを感じています。闘いは日常的に継続する必要があるから〈生活〉の問題は大切だと思う。

〈高知　K・W〉

たしかに〈生活〉は大事である。しかし人には〈堕落する自由〉さえあるのではないでしょうか。闘いを日常の中に組み込むといったところで、〈生活〉〈闘い〉或いは〈生活〉=〈闘い〉というだけのことだ。日本人の思考には儒教の影響がぬけきれないような気がします。

〈福岡　S・E〉

――北見ナミ・室伏真子・共選

Ω　Ω　樹　認　Ω

編集者でもないのに、なぜかアンケから選び出す役を引き受けてしまった。才三者的立場からは何も出て来ない。具体的に関る中でしか自連との関係は生まれないのではないか。アンケートを読んでいるうちに出てきた問題――私にとって自連とは何か――に答を出さぬまま、一体私に何が……?

〈ナミ〉

何から始めようか

＝〈社員〉流動化のために＝

〈自連〉―〈読者〉の固定した関係を打ち破らなければならない何としても。〈編集者〉―〈読者〉の間のみにとどまっていた関係をより拡げてゆかねばならない。〈読者〉が何かを求めるとすれば、それは〈編集者〉に対してではなく他の全ての、又は一部の〈読者〉である々きである。

読者会

読むだけの読者自身が動き始める契機として、読者に対する具体的な仕かけが必要となる。その意味からも、郵送のみに頼った領布方法にも検討を加えた。そこから二つ出てきたのが読者会で直接手渡すという方法である。このことはあるアンケートによって示唆を得た。

まず、編集スタッフが出かけていく場合には、読者の『自連』に対する反応が直接つかめるし、読者会に参加した読者の自連との関係もより直接的なものとなっていく。それは読者が自らを〈社員〉として意識するきっかけとなり得る。

それよりもここで強調したいのは読者自身の手で開かれる読者会のことである。読者会を開くことは、その読者自身がすでに自連社員として主体的に動き始めていることを示している。さらに、そういった読者会はこれまであまり見られなかった読者同士の横のつながりを生み出す第一歩となる。『自連』を媒介として、その地域の読者同士が知り合い、お互いの関係を深めていけば、今一部でささやかれている「各地に無数の○○自連を？」ということへの展望も開けてくるのではないだろうか。自連社へ姫路・大阪）に集中するのではなく、このように拡散することによって、〈社員〉の動きの中に解消されて行くことこそ自連にふさわしい。

㊙「読者会を開きたい」という人には連絡あり次第、便宜をはかり、こちらのスタッフもできるだけ参加したいと思います。ただ、自連社と読者のつながりは、基本的には『自連』を読むというだけのものですので、その地域の読者名簿を無条件にお渡しするわけにはいきません。

㊙まず大阪では五月の連休明けから杉原と下条が読者会を始めます。詳しいことはおってお知らせします。

紹介

これまでの〈紹介〉方法はおよそ次のようなものであった。読者が紹介したいと思う知人の名をアンケートに書く→自連社ではアンケートを見て「誰々さんの紹介で……」と書き添えて自連を二号送る→その後反応がなくても三回送り続ける。この方法では仕かけが一方通行であるし、初めの読者は紹介しっぱなしですんでしまう。

ではどう変えるか？　一口で言えば、読者自身が紹介したい人に渡すということである。最初、その人を自連社に紹介するのはこれまで通りだが、それを受けた自連社では、その人数分だけの『自連』二号ずつを紹介者に送る→紹介者はその『自連』を知人に紹介する（渡す、送る）→その後二回自連社から直接送る。

こうすれば仕かけは一方通行ではなくなり、正しい意味での〈紹介〉となる。そして紹介者は自連社員としての行動を起こすことになる。こうした中から、例えば先に挙げた読者会を開く際などの〈核〉となる社員が生まれてくるのではないか。

一方、紹介される方にしても、みもしらぬ何井孝からの封書がいきなり届くよりは、知人から受け取る方が異和感がずっと少くてすむだろう。

しかし、この方法にはすでに反論が出ている。①直接送るのに較べて手ごたえが弱い。それは発行に携わった者としてはいやなことだ。②知人から受け取ったのではそれまでの関係に埋もれてしまって、自連との関係は生まれないのではないか。

この反論に対しては、ある読者からの手紙を載せて再反論にかえよう。

「私の場合、知人に見せてもらったのがきっかけです。また、友人に見せて反応してきた人とはこれまで以上の関係が生れてきているし、してこない人とは『何故？』と尋ねることで……。手渡すこと自体で何か新しい関係を生むことができるのではないでしょうか？」

㊙この方法は来月（28号）のアンケートから実施します。

アンケート

以前に数回「アンケート版」としてアンケートを作ったことがある。これは読者の〈個人通信〉としての性格をもたせようという、言わば〈逆流のミニコミ〉の試みでもあった。

その意味でも紙面に反映させていくことが要求される。これは当然のことでありながら、今まで不十分だったことだ。例えば、①「自由発言」欄の復活　②意見の集中している問題での紙上論争などを試みたい。アンケートをそのまま載せるというよりは、アンケートをきっかけとする交流の中から生れた原稿を増やしていきたい。

㊙アンケートの形式については、まだ検当中。新形式のアンケートは来月号から始まります。

伝言板

この欄に対して「役には立つがスペースをとりすぎる」という声が多い。これは性格のちがうものが混在しているせいでもある。そこで内容を整理してみたい。

まず、ゆンフの内容を抄出したものと内容に対する意見を述べたものは独立した小論文とする。「自由発言」欄に移す。また闘争報告的なものはある程度継続してとりあげる。こうすれば記事の間の有機的な関係を作り出せるのではないかへ紙面の上の自由連合〉

一方、伝言板に残るのはゆンフ案内へ羅列〉と、従来貧弱だったスケジュールの二つだけにする。

ゆンフ案内は内容抄出の方が便利という声もあるが、それに対しては、何合せにはできるだけ答えていくつもりだ。

スケジュールは編集スタッフがその気になっても難しい。全国の活動者の協力がどうしても必要である。「スケ帳」と呼ばれるものの羅列に終わらせないためにも、あなたの運動スケジュールを自連社に知らせて欲しい。先に挙げた読者会も軌道に乗ればこの欄に載せられるようなるだろう。

〈社員〉の行動は『自連』のための行動ではない。しかし『自連』を支えるものが〈社員〉の行動であることはまちがいない。（7頁下段につづく）

平和台レポート

本紙76号で紹介した神戸の平和台病院闘争はスト突入後二五〇日を越えてなお続いているが、四月一五日、二三日と連続して逮捕者を出すなど、情勢は風雲急を告げている。

官憲導入

小さいが、しかししぶとい闘いの炎を鎮火しようと焦る病院・官憲側の弾圧は日増しに激しさを加えている。官憲導入も三月下旬からの二〇日間に七回を数え、朝夕二回の日まで出てきた。四月一二日、私が平和台を訪れた時はこういった情勢だった。この日、組合員らは〈見せしめ逮捕〉の可能性と、その場合の対策などを協議していた。

一四日、団体交渉。病院側はさんざん引き伸ばしをやったあげく交渉を一方的に打ち切り、立ち去ろうとした。組合員が抗議するや、隠し持っていた痴漢防止用ネルを鳴らし、一一〇番へ連絡、二十数名の警官を導入。完璧なまでの用意周到ぶりを見せつけた上、院長秘書に対する暴力行為をでっち上げ、恫喝を加えた。しかしこの日は労組・共闘委と約五〇名の地域住民の抗議で警官はすごすごと引き揚げていった。

五名逮捕される

一五日、病院前には私服の車が待機していた。労組の広委員長はらは前日の事件に関して岡部院長を追求していた。午前九時、病院側は「三分以内に退去しない場合は業務妨害罪として逮捕させる」と書いたステッカーを貼付。間髪を入れず三〇名の警官を導入。広委員長、宗和書記長と共闘委のメンバー一人を売り渡した。

この不当逮捕の報を聞きつけ神戸・大阪から約二〇名が駆けつけ、午後五時半から病院前抗議集会、さらに長田署に抗議行動。（以上の分くは『週刊アンポこうべ』66号の記事からとっている。）

一七日、三名の逮捕者のうち、宗和書記長（准看）だけが釈放された。

二三日午前七時半、組合員が眼を覚まし始めた頃、13名の警官導入。組合員の生活の場である寮を家宅捜索。差し押えは資料などには及ばなかったが、いあわせた共闘委のメンバー二名を逮捕した。

同日午後、電話で話した限りでは展望が立たず、やや動揺しているふしが伺われた。

（杉原　哲生）

この闘いの炎を吹き消さないために、直接的には拘留されている四人への救援資金のための緊急カンパを訴えます。自由連合大阪（大阪市旭区大宮二郵便局留）でも扱います。

また、パンフレット『白衣の監獄を告発する――平和台の火は消えず』も扱っています。タイプ印刷・B5判・44ページ　頒価三〇〇円（〒別）

神戸付近のあなたへ、門前集会への参加を？（毎週火木土・午後五時半より）＊神戸市長田区平和台町一丁目二三ノ二。Tel 078-69-9276（呼出し可）。山電板宿駅下車北東。

自連に望むこと

三口いたいことを三口あう

体験記みたいなものばかりが記事になっているが、自連はもっと運動の理論のぶつけ合いの場になってよいのではないか。実践の理論、思想闘争の新しい試みと展開による問題提起がもっとラディカルにされてもいいのではないか。もし自連紙が実践的アナキストの機関紙ならばの話だが。自連紙がノンポリに対するアジビラを兼ねるのは今のところ不可能だと思う。

いかに我々が思想闘争と現地闘争（職場闘争）にあいて、我々の思想と行動を一致させるか――すなわちアナキストの現時点での有効な闘いを、思想的にも行動的にも例を通して

（　）

自分の運動から自連に関ること、それが〈社員〉の行動の基本である。その意味から、各地の運動と直接結びついている「伝言板」のことをここに書いた。

〈〉て○○。

この欄に書いたことは今すぐ実行に移していく。実際にやってみてまずいことがわかったり、強力な反論が出たりすれば、そこで考え直す。しかし反対者の数が多い場合でも強行するかも知れない。独善的とも言えるが、基本的には、「いやなら自分が乗っ取って変えてくれ」という姿勢をとるつもりだ。

しかし反論を期待していることに変わりはない。最終的に決定していくのは〈社員〉である。あなたが〈社員〉であるかどうかはあなた自身が決めること、そしてそれはぼくら自身にもはね返ってくるはずだ。

（文責・岩村宣生）

（　）

知りたいと思う。

X　X　X

頭数がどのグループでも足りないからか、自連紙がなんだか〝サロン〟的ムードで塗りつぶされているような気がする。具体的に言えば、個人が自分の立場を理論化しないで勝手に闘争に入っていって、受動的に体験談を語っている。そこには万人の敵も、自己に対する思想闘争も、連合も意識している影さえ見られない。

自連紙が〇ページ数において、制限がありすぎるので充分に表わすことができないのかも知れない。しかし悲観になれというのではない。言うことは言あうというのだ。

（アンケより　岩国　N・H）

（　）

組織パンフレット

自連大阪気付A研資料部　頒価（〒共）二〇〇円

大阪A研資料NO.1

昨年秋より開なれた大阪A研は読書会形式で行われており、一冊目を終える段階で、実践上必要な基礎学習をの声なる上なる。そして、原五郎訳『革命的国際連合の綱領』の後半部を復刻海賊版として作った。ほり版で略字を多用してあり、読みにくいことは保証する。残部は百冊。

パンフレット紹介

資料　釜ヶ崎を考える会

大阪市旭区大宮二郵便局留
自由連合大阪気付　釜ヶ崎を考える会
一五〇円（〒共）※一般販売は6月から

＊キャンプ概括／DLノオト（日誌）より／個人総括集／会計報告（統計資料）

×　×　×

今回（3、15～28）のキャンプは共同販売・自炊という新しい形態でもたれた。しかしあくまでウロチョロ族の域を出ぬ限界は、個人総括の中にも見えるようだ。問われるべきはキャンプそのものであり、参加者一人一人でもあるだろう。ただ共同販売という点には興味がそそられる資料である。

瘋癲アンコ行状記（4）

はじめてのはんば(2)

下条かおる

はじめてのはんばの雰囲気に溶け込めぬままの僕にとって外での騒動は想像に難かった。

半ば恐る恐る網戸のかかった窓に顔を近づけてみる。残念ながら視角には入らず、さて外に出てみるか、と思っていると本雇いのNさんが顔を真赤にし何か口ごもりながら飛び込んできた。

「何かあったんですか」

そんな僕の言葉も興奪したNさんの耳には捕えられなかったらしい。僕にあてがわれたフトンから少し離れた所には今日来たアンコ達の荷物が置いてある。Nさんはその内から一つ、うす汚れたスーツケースを選び出したものの少々ためらいを見せている。

「これがあのオッサンのやつは」

そんな事を尋ねられても何の事情も知らぬ僕には寝耳に水同然だった。「えっ？」と僕の口から出るか出ないかのうちにNさんはもうそのスーツケースをひったくるように持って出て行った。

僕もすぐにその後を追うように出て行った。おおよその見当はあたっていたようだ。はんばの本雇いの連中三、四人に取り囲まれのしられているのは、きざれもなく今日同じ車で来たアンコの中の一人だった。

ステテコ、クレーヨの肌着と紫の腹まき。ボタンのはだけた肩からは彫物へいれずみ）がのぞいている。アルコールに浮った首筋、ひげが濃くやせ落ちた頬。その容姿から推察するならば、おそらくヤクザくずれのように見える。

× × ×

「がタがタ能書へのうがきこばかりたれやがって。これ以上しようもないことヌカスンやったらどうなるかわかってるんやろなぁ」

「出て行ったるがえ、出て行ったるがえ。なんでこんなはんばにがまんしておらなあかんのんじゃ」

何かささいな文句でもつけたのだろうか、そのアンコは来た時と同じ肌着姿のままで足早に消えて行った。しかしまだ本雇いの連中はそのアンコをめぐりニヤニヤ笑いながら相談をしている。要するに何らかの制裁を加えるか否かの相談らしい。ところがその相談も、このはんばをとりしきっている番頭の一言で立ち消えになった――「しようもないことはやめとけよ。親方に迷惑かけるようなことはなぁ」。

この間他のアンコ達は何をしていたのだろうか。誰一人顔を出さず、すぐそばの食堂でビールを飲んでいたのだった。何といっても自分の身に火の粉がふりかからぬ以上、彼らにとっては知ったことではなかった。ささやかでも〈連帯〉のようなものを期待したものの、少々酔いのまわった彼らの口からは歯切れの悪い言葉しか返ってこなかった。

「しようもない事言わんのんが身のためや、あいつの言うとおりやけどなぁ…」

一もんちゃくあった後の食堂の雰囲気は悪かった。僕はサービスのビールを受けとり大部屋にそくそくと引き上げることにした。

× × ×

部屋では、さきほどの主役Nさんがふてくされて漫画週刊誌をめくっていた。腹の虫がまだ納っていなかったせいか、かっこうの相手を見つけたとばかりに話しかけてきた。それははんばの事を知らないだろうということを見通した、若い僕への御訓辞であった。

「ええか若いの。はんばちゅう所はなぁ、能書にれたらあかん、アンコはアンコらしゅうしとかなあかんのや。おとなしゅうしとったらちゃんと銭をもらえるし可愛がってもらえる。それが雇うてもうてる親方への義理ちゅうもんなんや…」

このNさんの言葉に象徴されるような雇用観念は一体何なのだろうか。

ただの一枚だって契約書類がある わけではない。書類がないからこそ それに代わり得る不文律が必要となってくるのだろう。放り出されたアンコは最初のメシに文句をつけた。ただそれだけのことが能書、つまりよけいなことを言うことであり、親方への義理を破ったと判断されたのだ。

× × ×

やくざの正業としての建設業界への組み込みは、「義理」に収約される封建的関係観をその雇用関係に持ち込んで来た。賃金はアンコがはんばを選ぶ際の大きな判断基準になる。しかし選ばれたはんばにとっては、その選ばれた瞬間からそれは度外視される。つまりへ選ばれる〉ことにおいて、義理＝対人格における契約、いってみるなら親方の人間性への契約を意味することになるのだろう。そこから、能書きをたれても良いという答は出てこない。親方への無言の服従が義理にかなった道とされてしまう。さらにはアンコはろくでなしであるが故に、面倒を見てくれるはんばへの一切の文句は許されぬこととなる。しかし親方への信頼はどうあれ、アンコはアンコらしくすることにおいてその義理を果せることになるのだろう。

アンコらしさとは何だろうか。あるアンコはこう教えてくれた。「朝は遅く仕事を始め、帰りは一番早く帰り、知っている事でも命令されるまでやらず、とにかく仕事はできるだけやらん事だ」と。このアンコらしさに、はんば側が要求してくるアンコらしさというオヌラートでいかに薄くゞみこむかが問題となるのだろうか。

アンコは既知の領域に留っているかぎり、アンコらしさという既知の義務を履行している限り自分達の世界を信用することができる。そしてアンコというこれ以上落ちようのない階層を直ちに安全ならひに保証と同一視する事をその生活から学ばされたのだ。

反抗する事においてではなく、従う事においてでもなく自分自身を確認したければトンコするだろう。最終的に保証されているのが自分自身の肉体だけなら、トンコする事も認められて然るべきだろう。但し、見つかりさえしなければの話だが。

× × ×

酒もかなり入っていたNさんの話は終るに終らなかった。気がつくともう外は暗くなりかけていた。ふぅと息を抜くと急に腹の虫が騒ぎ出す。何の事はない、晩メシを食うことすら忘れていたのだ。あわててNさんと食堂へ足を運んだ。しかしまだメシを食っていなかったのは僕とNさんだけではなかった。

そしてまだメシを食っていない一人のアンコは、このはんばで寝ることもなかったのだった。（つづく）

自由連合アンケート

N-ro27

☮ このアンケートは、「姫路市亀山354　向井方　自由連合社」宛へ送って下さい。

☮ 「じれん」を毎号確実に読むためには、定期購読を申し込んで下さい。

☮ 購読料・カンパ等は必ず、振替口座《大阪1264　自由連合社》へ送って下さい。向井宛では届きません。

☮ あなたも原稿を書いて下さい。その他記事になるようなビラ・資料等も送って下さい。自連は多くのグループ・ミニコミとの交換を希望しています。

アンケ　その1

1 本号の中で、読むだけの値打があったと思われるもの。

イ. ない　ロ. あった { ___ ページの _____ / ___ ページの _____

2 こんなもの読んで損した(時間とかエネルギー等がつと思うもの。

イ. ない　ロ. あった { ___ ページの _____ / ___ ページの _____

3 自連紙の送付について。

イ. 申し込み済み　ロ. 本号から購読　ハ. もういらへん

ニ. 時々カンパするから送れ　ホ. 次号から ___ 部に変更

4 氏名 _____ 仕事 _____ 年令 _____

住所 _____

5 好きな歌 _____ _____

アンケ　その2

今後、自連紙に載せたい記事・事務的な通信・本号の記事に関して、又は関さないで言いたいことを何でも書いて下さい。

さいごに

新しい人を紹介して下さい。

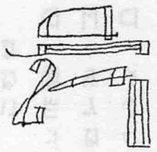
氏名 _____ 住所 _____

氏名 _____ 住所 _____

☆自由連合派を解体し、四面楚歌の中で闘争に進軍せよ！

自連社内報

発行 自連社内報(P)社



製作路線を確立し直ちに破壊せよ！

27号製作遅れに関する製作集団批判として

自連を手にする社員諸君！　27号を御覧になって御解りのように、私達製作員は発行3年を迎え問題に直面している。この紙面は今後の自連紙上で行われることとなろう。

今回の発行遅れをあげつらって、時間を巡登り説明したい。4月初旬、アジトの運営に関し問題を起った。責任ぶりを出入りする者が、怒鳴んでおり、それをきっかけとして討論を始める。中途半端にすませることを出来ず徹底化を計るがそれの課程を各々の関り方をあいまいなことに気付いた。原稿を出来ない理由もあって4.10及11に討論合を持つ。10を確認したことは、3月中旬のM氏提案による集合の意味を表明に出んでおらず、それは自連製作の不手際と現れたことだった。11は各々の関係の確認を通じ自連を問い直す作業。結論は当然のことながら出ない。しかし討論をきっかけとなるのだして全社員に訴えることになるが、最年少のSに文章化を押しつけ残りの人間は知らぬ顔の半兵衛。それで遅れました。ごめんなさい。

ここで自連製作などのような意味を持つのか考えねばならないが、緊急の課題として発行することを迫られている。さって社員に呼びかける。自連との関りを明らかにし製作に関することを。今までにも度々述べられたなら私達は自由連合である。自連紙は単なる政治新聞であり、媒介にすぎない。が、媒介が媒介として存在しないなら、その必要性を問い直し行動しよう。

製作集団は自連紙を必要と考える。現在の不備な製作態度を路線に止揚したい。製作路線を確立するのは可能だが、それは直ちに破壊されるべきだ。なぜなら完成されることはあり得ないし、一応の水準に達したと安住するなら発達しないことになる。絶えざる変化、進展こそ自由連合であり、叛乱と運動なのだ。

少々、調子に乗りすぎました。今回自連紙の発行が遅れましたのは、春の陽気にうつつを抜かした為です。社員の皆様にお詫び申し上げます。

4月23日午前1時頃、Aアジトには疲れた顔の男が4名。27号の1ページ目を作るにあたって討論に参加しており、逃れ得ぬ責任、それに伴う悲愴感を面に表わしにらみあいを続ける。

M：この原稿はなんやねん、こんなあいまいなもん切れるか！

S：そんなん言うてもしゃあないやないか、ほな書き直したらええやねえ。

P：みせてくれ

M：始めの所な問題や

S：はは、今度の一面あもろい、けっさくや

S：冗談な、いちびっとんな

S：そやなって、あもろいなな、フムフム、あやすみィ

P：政治新聞みたいやなあ

M：そや、主体があいまいなんやS：一面で出してるなら書きゃうならない

P：適当に誤魔化してのってきえ

M：あんはん、これは自連やで

P：そやった、けど一面はアジやS：あの討論の内容きめたら、そないなるなな。4人共あったやないな。

M：へッ

P：へー

S：ヘェ

S：あーあ、屁も出えへんなぁ

誤植不可

④　先記のような次第ですので、27号は問題がありますから、あ読みになる所は1乙面を吟味して致き、しかる后6面へお進み下さればさろしいかと存じます。

（4月23日　早朝）

27号製作で僕達は突然ひるんな方向へと関りなら記事を作ってしまった。討論の最中も互いに顔を見合わせ、真意を確かめなら迷げ出す様合をさなしていた。とうとう見付からないまま今に至る。結果として今までの自連のあり方に対する批判となってしまった。批評としての批判を真の批判に変え得るかどうか、不安だ。その意味で僕達の造反は理ではない、まだ感性の域を脱していない。

続々刊の辞

第1号の社内報社綱領(案)①の意味が、両派が解体した為なくなってしまった。言葉を替へて代案を出す。

①　自連社内部でへそのとき活版派〉が活版印刷した場合のへそのときはり派〉の優雅な宮殿？

めぐる日日も一日ごし、ほッ何の因果かたたったか、気がつきゃあなんだっ、俺が書いてるじゃないか。気楽に人の書いたビラを読んでいるあなた。このビラを読むときあなたは、不可視の関係を持つ自連社員なのです。

混乱に輪をかけるために

この下に書いてあるのは単なるCUTではなく、タイトルで、一頁のは飾なのです。なぜなら僕達自連社内報を切ってあり、まぎれもなく僕の意志でやったのだから、このような関係となります。